

[25_2] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
25(2)

<https://doi.org/10.15017/18009>

出版情報 : 図書館情報. 25 (2), pp.9-16, 1989-07-20. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 25, No. 2 (1989)

目次

- アメリカ図書館見聞記 ----- 9
- 昭和63年度大型コレクション及び特別図書について ----- 13
- 平成元年度目録システム講習会を開催 ----- 14

アメリカ図書館見聞記

合山 究

私は昨年(1988)の3月から10ヵ月間、文部省の在外研究で外国へ出張し、米国のハーバード大学エンチン研究所で5ヵ月過ごし、ついで欧州各国をまわったあと、中国に入り、上海の華東師範大学で4ヵ月過ごした。その間、上記の両大学の図書館をはじめ、米国・英国・中国などで、東亜(東洋)系の図書館を中心に、かなりの数の大学や公立の図書館を見た。だがしかし、それらの国々の図書館の中で、私にとって一番印象的だったのは、何といたってもアメリカの図書館である。アメリカの図書館事情については、すでに知る人も多いかもしれないが、私なりに感じたことや印象に残ったことを書き記すことにしよう。主観的な観察や不正確な記述もあるだろうが、ご寛怒願いたい。

図書館に自由存す

アメリカの図書館に行くと、まず最初に驚かされるのは、やはりその自由さ、開放性であろう。レーガン大統領が退職の弁で、自由こそアメリカの誇るべき価値だと力説していたが、レーガン氏が述べた自由の価値やありがたみはさておき、私はアメリカにおける図書館の自由さには文句なしに敬服した。私から見れば、アメ



ハーバード・エンチン図書館

リカの自由は、図書館にありといえるほどである。アメリカの図書館の自由さ、開放性については、すでに知られていることかもしれないが、ここに私が経験した2,3の例を挙げることにしよう。

アメリカの図書館は、稀覯書以外はおおむね開架式で、どこでも本をじかに手に取って覧ることができるようになっているが、ボストン市立図書館に行った時のことである。私は大きなカバンを提げたまま、何のともがめもなく中に入り、本を覧たあと帰ろうとすると、何人も人がならんでいる。あれ、カバンの中身を調べることもあるのかと不審に思って、よく見ると、そ

れは本を借りる人たちの行列であった。出口には一応、カバンの検査をするために係員が配置されてはいるが、それは形だけで、本を借りない人はカバンを提げたまま、何も言われることなくそのまま通り抜けた。アメリカの市立図書館は、万事こんな調子である。

また、コロンビア大学の東亜図書館でのこと。私は妻と2人の子供を連れ、旅行の途中ここに立寄り、書庫の本を覧せてもらおうとした。一応名前を告げたところ、身分証明書を見せることもなく、すぐさま許可され、私はカバンを持ったまま、子供たちはリュックサックをかついだまま、一緒に書庫の中へ入れてくれた。しばらく書物を覧たあと、また受付のところに出てきたが、係員から「またおいで!」とやさしく心をかけられて、送り出されただけだった。

次にこれは、エンチン図書館の頼永祥副館長から聞いたことであるが、アメリカのある小さな図書館では、管理者が朝と夕べ、鍵の開け閉めにやってくるだけで、図書を覧たい人は自由に見、借りたい人は自分で記帳して、自由に借りたり返却したりするということである。

以上、2,3の例を挙げたが、時たま例外もあるとはいうものの、アメリカの図書館はおおむねみなこんな工合であり、身分を問わず、覧たい人には誰にでも見せ、借りたい人には誰にでも貸すことを原則としている。日本なら相当の貴重書とみられるものまで、開架式に陳列されているので、もし本を盗もうという悪心をおこせば、何冊でも盗むことができるであろう。しかし、書物を覧たり借りたりする者には悪人はいないと思っているのか、信じられないほどのおおらかさで、図書館が運営されている。私ははじめこの底抜けの自由さに驚きあきれ、頼氏にその理由をたずねてみた。すると、「大体、本というものは、万人に自由に平等に読まれるべきものである。また、こうすると人件費も少なくてすむ。本はもともと市民の税金によって購われたものだから、たとえ盗まれたとしても市民に還元されるだけだ。」、といった答えが返っ

てきた。ああ、これがアメリカの自由というものと、私は感心した。

しかしまた、これとは逆に、本は万人共有の財産だから、失ってはいけない。そのためには厳しく管理すべきだ、という考え方も成り立つはずである。双方の考え方をどう調整するかが問題であろうが、アメリカでは極端に前者へ傾いているようである。どちらがいいのか私には分からないが、ただ利用者の立場から言えば、日本のように他大学の図書館に行つて、恐る恐る名前や身分を名乗り、緊張のあまり血圧を上げながら、閲覧を乞い願いたてまつるほうがよいか、それともアメリカのように、にこやかな微笑をもって迎えられ、皆さんはお客さんですよ、どうぞ利用して下さい、という態度で接せられるほうがよいかは、問わずともあきらかである。

図書館学と図書館員

図書館の自由さ、開放性ととも、図書館や図書館員が非常な権威をもっているということも、わが国と大きく異なるところであろう。アメリカでは、大学は図書館をもって成り立っているといつてよいほど、大学における図書館の比重は大きい。大きな大学はみな、その大学のシンボルともいべき著名な図書館を持っている。そして、図書館員の地位も、日本とは比較にならぬくらい高い。日本では館長や分館長は教授が兼ね、図書館員は一般に事務員にすぎないが、アメリカでは図書館は研究組織から独立し、館員は教授と対等の専門職員である。館長や分館長はもちろんのこと、正規の司書でさえ、ライブラリアンの資格をもった者の中から、全国的な公募によって選ばれる。たとえばニューヨーク・タイムズや図書館雑誌などに公募の記事を載せ、応募してきた人の中から最もふさわしい人を採用するのである。女性を差別したり、優秀な人を落としたりすると、訴訟を起こされることもあるので、公平を期さなければならない。

このようなことが可能なのも、図書館学講座をもった大学が、日本ではわずかに慶応と図書館情報大学だけなのに、アメリカでは50数校もあり、ライブラリアンという職業が確立されているからである。日本もこうなれば、書物の専門家が研究組織から独立し、(もちろん教授の意見も聞きながら)必要な書物を買ってくれることになるので、現在のように、教官が書物の購入にいつも気をつけねばならぬという煩雑さはなくなるであろう。

エンチン・ライブラリー

私が在籍したハーバード・エンチン研究所(図書館)は、日本でいえば、東大の東洋文化研究所や京大の人文科学研究所などに相当するもので、アメリカの東亜研究所の中では最も歴史の古い、由緒のある研究所の一つである。その沿革を語ることは、アメリカの東亜研究の歴史を語るといってもいいほど重要であるが、紙幅の都合でここには述べない。(興味のある方は、「アメリカにおける東アジア研究—ハーバードの東アジア図書館から—」(藤原貞雄訳, アジア・レビュー, 1978春号)などを参照されたい。)ここではただ、エンチン研究所(図書館)が、ハーバードにおいて、極東諸国の研究者の中心、ないしはたまり場になっているということだけを述べたい。というのは、エンチン自体が、毎年20名近い東亜の研究者を受け入れているからであるが、そればかりではなく、ここには日本・中国・韓国などの東亜諸国の新聞が、一日遅れ(ただし日付けは同日)で届くので、これらの国々の研究者や留学生が新聞を見るために立寄るからである。

さてそれはともかくとして、私がここで驚いたのは、和書が意外に多いことである。漢籍の蔵書量では、エンチンは कांग्रेस・ライブラリー(国会図書館)に次ぐということは知っていたが、和書でも、圧倒的に多い कांग्रेसは別格として、大学では、パークリィ, コロンビア, ミシガンなどとならんで最も多い部類に入ると

いうことは知らなかった。また、次に驚いたのは、やはり何といても膨大な図書予算を持っているということである。エンチン図書館では、「どんなに本が出て、みな買え。本を買うことをやめるな」という達しが上から出ているそうで、現に漢籍では、どんな大型図書でも出たものはみな買うようにしているという。本を買うのに、金銭的に困ることがないというのは、まことに羨ましい話であるが、ただ整理が追いつかないのはここも同じで、私が行った時にも、最近出版された中国書は、未整理のまま地階の書架にならべられていた。

エンチン図書館には、現在、館員が33名いて、ふつうの日は朝9時から夜10時まで開いている。机も書架の横にあるし、カバンを持ったまま中に入れるので、万巻の書物に囲まれて、何ん自由なく勉強できる。また、必要があれば、長期借り出しも可能である。このように図書館が充実しているので、ハーバードの教授でさえ、日本の教授のように、陋居がつぶれるほど多くの書物を、家にかかえなくてもすむわけである。

日本学と中国学

アメリカの東洋研究は、大体、「イースト・エイション・スタディーズ」とよばれている。ヨーロッパでは、「オリエンタル・スタディーズ」といわれている。これらの言葉からもわかるように、アメリカにとっての東亜地域の意味合いは、ヨーロッパにおけるそれよりも重要である。それだけに東亜地域の研究は、アメリカのほうがさかんであり、図書館の蔵書量も多い。東亜諸国のうちでは、中国と日本の研究が一番さかんであり、これを韓国が追うという感じになっている。大体、どの大学でも、アメリカの東亜研究は最初中国研究からはじまり、日本研究は遅れてはじまったようだ。しかし、戦後、日本研究がめざましい進展をとげ、今ではどこでもほぼ相拮抗した状態にあるといつてよく、大学に占める語学教師の数では、むしろ日本語のほうが中国語をしのぐほどだといわれる。蔵

書も、単に冊数だけの比較であるが、コンGRESS・ライブラリーでは、漢籍よりも和書のほうがはるかに多く、大学でもパークリイなどは、和書のほうがすでに漢籍よりも多くなっている。文化の研究もやはり経済力の反映であり、昨今は、エンチン図書館でも韓国の文献が急速に増えはじめており、いずれ中・日・韓が鼎立した状態で研究される時代が来るかもしれない。

私は実のところ、アメリカに行くまでは、西洋では依然として日本を、中国の文化的属国ぐらいにしかみなしていないのではなからうかと思っていた。ところが、アメリカに行ってはじめて、日本は東亜の文化大国として、中国と厳然と相對峙しており、中国文化に比べて全く遜色のない堂々たる大文化を有していることがわかった。美術館にも日本文化の粋ともいべき素晴らしいものがおびただしく展示されていて、私は米国ではじめて、日本文化の優秀性と外国における評価の高さを認識させられたような次第である。

ところが、わが国の日本研究者たちは、この事実をあまり知らないようである。エンチン図書館にも、日本人の専門家の来訪は極めて少ない。一方、中国の研究者たちは、大陸や台湾から連日のように参観に訪れている。参観者の多寡だけで言うわけではないが、やはり日本の文化的進出は、経済的進出に比べると、極端に少ないように思う。今後、どしどし日本学の専門家が外国に出かけ、各大学の東亜図書館を訪れて、日本研究の実態を見ていただきたいと思う。これは、単に文化的交流に資するばかりでなく、日本学の研究者にとっても、日本文化の真の価値を再認識させられ、文化的な自信をもつ契機となるにちがいないからである。

忘れ得ぬ人

図書館員には、隠者のような人が多い。書物の中に埋もれて、野心や名誉とはかかわりなく、書物とともに化すような人生を送る人である。わが国の図書館においてさえ、このような人



エンチン図書館日本部門主任
青木利行氏

に出くわせば、何となく好ましい感じをおぼえるものであるが、ましてそのような人が、遠い地球の裏側で、わが国の文化のために、地道に仕事に励んでいるのを見たときには、なおさら頭の下がる思いがするであろう。私はエンチン図書館でそんな人に出会った。青木利行さんである。

青木さんは、1935年に新潟県に生まれ、高校卒業後、渡米し、ニューヨークのコロンビア大地理学科・同大学院図書館学修士課程を卒業したあと、コロンビア大・イエール大の図書館に勤め、1975年よりハーバード・エンチン図書館に移り、以来、日本部門の主任をしている。ハーバードに移ったあとも、学問好きの青木さんは、昼間、エンチンに勤めながら、夜間にはボストンのノース・イースタン大大学院政治学科に通い、これも数年前に卒業した。『電子計算機と図書館』、『インテリジェント図書館』（雄松堂出版）など、数冊の著書や訳書をもち、奥さんもコロンビア大で博士号を取り、『風土記』の英訳などがある。

こう言うと、いかにもきらびやかな経歴の持主で、近づき難い人のような感じを与えるかもしれないが、青木さんは決してそんな人ではない。小柄で、眼鏡をかけ、控え目で、飄々とした青木さんは、およそそんな経歴とは無縁のように、毎日エンチン図書館の地階にあって、日本関係の書籍の購入や整理に没頭している。世俗の名利を求めず、ただ黙々と仕事をしている

さまは、中国のいわゆる「書隠」（書物に隠れる人）さながらである。

私は青木さんと何度か一緒に食事をし、いろいろな話をしたが、その合間に、私は彼に「どうして異郷で長く働いているのですか。日本に帰る気はありませんか」とたずねてみた。すると、彼いわく、「日本人は留学しても、すぐに帰国する。こちらに留まって長く働こうとする人は少ない。たまたま私は長くいただけです。また、今さら私が日本に帰ったところで、日本の図書館で、私を受け入れてくれるところはないでしょう」と。私は最後の言葉が妙に気にかかったが、考えてみれば、日本の官立図書館には、青木さんのような人を中途から雇用するシステムはないのである。私は日本の図書館の人事面の閉鎖性についても、慨嘆せざるを得なかった。

青木さんはおそらく今後もずっと、エンチン図書館で黙々と働きつづけ、日本文化の普及のために、裏方に徹した地味な人生を送られるにちがいない。今日、日本の海外への経済進出は、エコノミック・アニマルばかりを生み出し、外国人のひんしゆくを買うほどであるが、青木さんのように文化的な面で地道な努力を続けている方がおられることは、日本にとって、どれだけありがたいことか知れない。

エンチン図書館では、青木さんの他に、副館長の頼永祥氏、レアブック・ルーム主任の載廉氏などにも大変お世話になった。いずれも忘れがたい方々であるが、ここでは紙幅の関係で、日本人の青木さん一人について述べさせていただいた。
(教養部 教授)

(((資料紹介)))

昭和63年度大型コレクション

下記の資料を購入致しましたので、ご利用下さい。

大隈文書 マイクロフィルム版
35ミリポジティブロール、186 リール
(原本 早稲田大学図書館所蔵)

本文書は、明治、大正時代に大蔵卿、外務卿、内閣総理大臣も歴任し、かつ立憲改進黨の創始者であった大隈重信が収集保存した1万3千余点(文書 5,200点、書翰 8,200通)にのぼる資料を、マイクロフィルム版で復刻したものであり、その内容は明治・大正期の政治外交、経済、財政、法制、交通、商業、農林、土産業、宗教、軍事、統計、外国人等多岐にわたっている。本文書利用際には、早稲田大学編集の「大隈文書目録」を参照されると効果的です。

昭和63年度『特別図書購入費』による購入図書について

下記の資料を購入しましたので、ご利用下さい。

— 中央図書館 —

Cognition : International Journal of Cognitive Psychology. Vol. 8-12 (1980-1982)
(認識心理学国際研究誌)

Human Factors. Vols. 1-25 (1958-1983) With G.I. Vols. 1-17.
(人間要因)

Правда. 1930-1977
133 reels. Microfilm
(プラウダ：ソ連共産党中央委員会機関誌)

U. S. Congressional Committee Publications.
Senate Committees : Labor and Human Resources.
1979-1987 1 set. (1,958 sheets) Microfish

(アメリカ合衆国議会出版物。上院委員会：労働と人的資源)

Zeitschrift für ausländisches öffentliches Recht und Völkerrecht.

Begr. v. V. Bruns. Hrsg. v. Kaufmann, Smend, Triepel, Bilfinger, Mosler U. S.

Bd. 9-22 (1939/40-1962)

(外国公法・国際法雑誌)

監獄学 小河滋次郎著
明治27年刊

景印四庫全書珍本 九集 精裝本

景印四庫全書珍本 十集 平裝本

衆議院公法

第14回帝国議会 (1899) - 第108国会 (1987)

35mm 60リール 解説書付き マイクロフィルム

日本植民地教育政策史料集成 (朝鮮編)

第7集～8集 (全25巻)

平成元年度目録システム講習会 (地域講習会) を開催

昨年に引きつづき、この講習会を学術情報センターと九州大学附属図書館の共催により、平成元年5月22日(月)から5月26日(金)までの5日間当館を会場として開催した。

この講習会は、目録所在サービスの一層の推進と、大学図書館の現場における目録業務担当者の教育訓練を目的としたものである。実習に使用出来る端末機に限度があり今回は、目録業務担当者で未受講者12名(内訳は、九州大学9名、福岡教育大学2名、九州工業大学1名)に制限した。経験を積んだ優秀な講師陣と実習を主体にした講習内容のなかなか熱のはいった講習会で、好評裡に終了した。特に、実習にあたっては、九州大学の講師全員の他に第一及び第二目録情報掛の掛員がアシストを努め実践しながら好評であった。各大学共、学術情報センターへの目録登録業務が漸く軌道に乗りつつある時期であり、受講生の現場での今後の活躍が期待される。

なお、講師及び講習内容は次のとおり。

1. 講師

桂 英 史

(学術情報センター助手)

酒 井 清 彦

(学術情報センター図書目録情報係)

園 田 国 昭

(九州大学附属図書館システム管理掛長)

木 村 優

(九州大学附属図書館システム管理掛)

原 田 紀 子

(九州大学附属図書館第一目録情報掛)

福 田 富 士 夫

(九州大学附属図書館第一目録情報掛)

2. 講習内容

第1日目 5月22日(月)	目録システム概論 目録情報の基準
第2日目 5月23日(火)	端末操作 端末操作実習 検索総論 検索技法
第3日目 5月24日(水)	登録総論 登録基本動作 登録実習1 書誌構造なし/見本登録/課題登録 登録実習2 書誌構造なし/洋図書
第4日目 5月25日(木)	登録実習3 洋書登録1 - 基本/書誌構造なし 登録実習4 和書登録1 - 基本/書誌構造なし 目録記述と入力仕様 参照MARCの変換仕様
第5日目 5月26日(金)	登録実習5 洋書登録2 - 書誌構造あり 登録実習6 和書登録2 - 書誌構造あり 登録実習7 修了実習 ローカルシステムとの関係、まとめ(質疑)

◆ 会 議

九州地区国立大学図書館協議会 (第19回)

〈とき：平成元年4月20日(木) ところ：北九州市 本館出席者：館長外4名〉

九州大学附属図書館を当番館として、15大学から40名が参加して開催された。まず、地区連絡館報告があり、その後次の協議題について討議が行われた。

1. 学術情報センター目録システム講習会への未接続館の参加について
2. 消費税実施に伴う対応について
3. 図書館職員の要員確保と研修について
4. ファックス(特にG4)を利用した複写サービスの充実について
5. 国立大学図書館協議会理事会(元年5月31日)で再度協議する諸案件(建築基準の見直し、保存図書館、職員確保、現物貸借規約案)について

協議の結果①「職員の確保と研修の充実について」及び②「ファックス(特にG4)を利用した複写サービスの充実について」の2議題を、第36回国立大学図書館協議会総会に九州地区からの協議題として提出することに決定した。

なお、新役員館として、九州大学、熊本大学が選出され、九州大学が引き続き地区連絡館となった。また、次期(平成2年度)の当番館は大分医科大学に決定した。

九州地区大学図書館協議会総会 (第40回)

〈とき：平成元年4月21日(金) ところ：北九州市 本館出席者：館長外5名〉

北九州大学附属図書館を当番館として、加盟館54館中53館から109名のほか、オブザーバーとして福岡アメリカン・センターから2名の参加を得て開催された。まず、永年勤続者及び退職者表彰、幹事館報告があり、その後昭和63年度決算・監査報告及び平成元年度予算案の審議がありそれぞれ承認された。続いて国立、公立、私立大学及び私立短大から各部会報告があり、その後次の協議題について活発な討議が行われた。

1. 九州地区大学図書館協議会会誌の編集について
2. 学術情報システムのデータ入力及び利用上の諸問題について

午後は、北九州大学教授北九州産業社会研究所長白石馨氏の「重化学工業都市の衰退と再成」と題する講演があった。

なお、次期(平成2年度)当番館は大分医科大学に決定、また平成1/2年度の幹事館として九州大学が再選された。

本学関係の被表彰者は次の7名であった。永年勤続者：原田紀子、本山睦、森田安子、尾上五男、林田和政 退職者：有田滋子、豊原怜子

福岡県・佐賀県大学図書館協議会総会

〈とき：平成元年5月18日(木) ところ：北九州市〉

産業医科大学図書館を当番館として、加盟館41館中39館から61名の参加を得て開催された。まず、昭和63年度決算・監査報告があり、その後前年度からの継続審議である会費値上げ(平成元年度から1,000円アップ)について提案があり審議の結果それぞれ承認された。また、この会費値上げに基づく平成元年度事業計画及び予算案並びに会費値上げに伴う会則の一部改正について提案があり審議の結果それぞれ承認された。続いて、昭和63年度地区研究会活動について北部、福岡、南部の各地区から詳細な報告があった。また、「産業医科大学図書館雑誌システム」について三菱電気九州コンピュータシステム(株)システム技術担当者から詳細な紹介があった。

最後に、平成元年度理事館に福岡女子大学、監事館に中村学園大学が選出された。

なお、本館から福山情報システム課長及び二宮情報管理課長補佐が出席した。

日本学士院賞等受賞者の業績展示

本学開学記念行事期にあわせて、本年度も「日本学士院賞等に輝く先達の業績」を下記日程で展示し、教職員・学生・来賓が多数来館された。

1. 展示場所及び期間

平成元年 5月9日～15日	教養部分館	玄関ホール
平成元年 5月16日～22日	医学分館	玄関ホール
平成元年 5月23日～29日	中央図書館	玄関ホール

『桑木文庫』の展観

理学部創立50周年記念学内開放の一環として、理学部が所蔵する「桑木文庫」(故桑木或雄工学部教授(日本科学史学会 初代会長)蒐集の科学史関係の古文献)を去る5月13日(土)から1週間、中央図書館ホールにおいて、展示と全蔵書の公開(13日のみ)を行った。

展示資料は Isaac Newton の Philosophiae Naturalis Principia Mathematica (1760) William Gilbert の De Magnete. (1600) Jean Baptiste Joseph Fourier の Théorie Analytique de la Chaleur. (1822) 「塵劫記 吉田光由編 寛永4年」「古今法記 沢口一之編 寛政5年再刊」「括要算法 関孝和編 正徳2年」など13点である。

期間中は、記念式典に参加の卒業生を始め学内外の科学史に関心をもつ多数の来館者があり盛会であった。

なお、「桑木文庫」の目録は、科学技術史研究(西日本科学史学会 日本科学史学会九州支部編) 2号(1968)に掲載されているのでご利用願いたい。(理学部 図書館)

法学部・経済学部から学生用図書約1200冊を中央図書館開架室へ

中央図書館が増築され、開架スペースに少し余裕が生じたので、かねてから各学部で学生が利用できる図書の提供をお願いしていた。今回、法学部から536冊、経済学部から612冊の学生用図書が中央図書館に移され、手狭まになった法律学資料コーナーをあわせて3階の南東側開架閲覧室の書架に配架し学生の利用に供している。今後もこのように繁用される学生用図書を積極的に収集して学習資料の充実をはかりたい。

◆ 人事異動

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 6.1 佐藤 光夫(情報管理課会計掛) 経理課用度掛 | 6.3 柴田 照代(薬学部学生掛) 情報管理課会計掛 |
| 6.2 仲原 裕子 退職(事務補佐員) 情報管理課会計掛 | |

◆ 日 録 (平成元年4月1日～6月30日)

- | | |
|--|--|
| 4.20 第19回九州地区国立大学図書館協議会 (北九州
ひびき荘於) | 5.30 国立大学図書館協議会受賞者選考委員会: 専門
委員会 (東大於) |
| 21 第40回九州地区大学図書館協議会総会 (北九州
ひびき荘於) | 31 理事会 (東大於) |
| 5.18 福岡県・佐賀県大学図書館協議会
(産業医科大於) | 6.20 分館長会議及び図書館商議委員会 (本館於) |
| 29 国立大学附属図書館事務部課長会議 (東京医科
歯科大) | 6.28～29 国立大学図書館協議会総会
(弘前於) |

編集委員 主査・辻本 和央, 委員・天野 二郎, 大神 義生, 青柳 良輔(中央図書館), 保田 秀人(医学分館), 森松 睦雄(教養部分館), 久保 昭夫(工), 下川 幸士(経)

九州大学図書館報「図書館情報」 Vol. 25, No. 2 (通巻154)

1989年7月20日発行・発行人 吉岡 千里

発行所 九州大学附属図書館・〒810福岡市東区箱崎6丁目10番1号 電話 641-1101 内線 2454